

物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、 海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究

小口, 雅史 / OGUCHI, Masashi

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2019-06-06

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月6日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03245

研究課題名(和文)物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究

研究課題名(英文)An Integrated Study for the Ancient North World across the Tsugaru Channel: Seen from the Material Culture and Spiritual Culture exchange and disruption

研究代表者

小口 雅史(Oguchi, Masashi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：00177198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：北方世界においては、擦文文化期以前(およそ10世紀以前)、土器・須恵器などの物質文化と、ガラス玉に代表される精神文化との間で、交易と交流の実相がかなり異なることが明らかになってきた。

北方世界の擦文土器は「蝦夷土師」と言われるように、本州の圧倒的影響下に成立した。須恵器生産の北限は青森県五所川原市であり、その須恵器が北海道に流入した。しかし今回の研究で、北海道のガラス玉については、組成や技法からみて、大陸沿海州との関係が認められる。アイヌ文化の成立に向け、その精神文化が大陸と同期していったのではないかと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来から北方世界(いわゆる「北緯40度以北」の世界)は、「もう一つの日本」といわれ、中央日本とは異なる独自の歴史を歩んだとされてきた。その一方で、北方世界の最大の特徴は「交易と交流」であるとされ、多くの物資が北方世界を結節点として移動していた。その中にはもちろん本州との交易品もある。

今回の研究の成果として、こうした交易と交流が文化にどのような影響を及ぼしたのかについて具体的な知見を得ることができた点大きい。特に精神文化と物質文化との間で交易と交流に大きな断絶を見いだすことができた。アイヌ文化成立の背景を検討するための重要な視点も得られたので、速やかに公刊して、今後の議論の素材としたい。

研究成果の概要(英文)：It has become clear that in the northern area of east Asia, before Satsumon culture period (before about the 10th century), the actual situation of trade and exchange is quite different between material culture such as Pottery and Sue-ki, and Spiritual culture represented by glass beads.

The Satsumon Pottery was established under the overwhelming influence of Honshu, as said to be a "Ezo-Haji". The northern limit of Sue-ki is Goshogawara City in Aomori Prefecture, and the Sue-ki devices flowed into Hokkaido. However, in this study, with regard to glass beads in Hokkaido, the relationship with the Primorsky Krai Region is recognized in terms of Materials and Techniques. It is thought that the spritual Culture was synchronized with the continent for the formation of Ainu culture.

研究分野：日本古代中世北方史、東アジア比較史

キーワード：物質文化 精神文化 ガラス玉 北の環日本海世界 北東アジア交流史 日本北方史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 列島の南北両端地域の史的展開過程については「もう一つの日本」という名の下、「日本国」=「中の日本」の在り方とは異なる特色が明らかにされつつある。特に中世において「ひのもと」と呼ばれ、名実共に「もう一つの日本」となった北日本の歴史は、多様な「日本史」のあり方を考える時に重要な存在である。この地域は津軽海峡によって地理的に二分されているが、この海峡は必ずしも常に「交易と交流」上の障害となっていたわけではない。本申請グループのメンバーによる近年の研究によって、北日本世界が宗谷海峡・間宮海峡を越えて、樺太から大陸沿海地方とも深い交流関係にあったことも解明されつつある。

(2) 以上のように海峡を交流の重要な通路とする「北の内海世界」が津軽海峡よりさらに北に広がっていたことは確実で、そうした古代から中世まで一貫して絶えまなく続いた交易と交流のもたらすものが、北日本世界あるいは「中の日本」にどのような影響を与え、それが古代から中世へという歴史の大きな転換にどう関わったのかを解明することが新しい課題として浮かび上がっていた。

(3) 北日本世界における中世とは、それは即ち「アイヌ文化」の成立につながる。中世におけるもう一つの日本を象徴するアイヌ文化は、現地における文献史料の稀薄性からその解明は決して十分ではない。重要な役割を果たすべき北方考古学においても、擦文文化の終末からアイヌ文化の成立期をめぐっては、いまだに大きな見解のズレが存在していて、なお定説は得られていないのが現状である。様々な交易と交流からその実相に迫る必要がある。

2. 研究の目的

(1) これまでの本申請グループの研究によって、北の内海世界における交流について、精神文化と物質文化で、必ずしも同じ動きを示さない可能性が示されている。特に精神文化を代表するガラス玉や墓制、集落等について慎重な検討が必要となる。両者のズレがどれくらいのものであるのか明らかにした上で、その史的意義をどう捉えるべきかについて検討する。特にガラス玉はアイヌ文化においても重要な位置を占め、続縄文期～擦文文化期のガラス玉のあり方との比較研究が大きなポイントになる。

(2) 一方で、従来の研究でしばしば指摘されてきた本州と北海道との間の物質文化の交流を精査して、精神文化の交流との比較研究を行う。

(3) 最終的に上記2点を総合することによって、北方世界の古代～中世期における文化交流と文化形成の実態に迫ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 精神文化を代表するガラス玉について、大陸沿海地方、サハリン、北海道、北東北出土のそれを、考古学的成果を十分に踏まえながら、肉眼観察で製作技法を明らかにし、一方で近年精緻な分析が可能になっている化学組成分析の成果を援用して、両者を総合してガラス玉の地域別特性を明らかにした上で、地域間の特性を比較する。また精神文化比較研究を補うものとして、墓制・住居址などについても事例を集成し検討する。

(2) 物質文化を代表するものとして10世紀頃の土器類を取り上げる。「蝦夷土師」とも言われる擦文土器と、本州から北海道に渡った須恵器、大陸のパクロフカ文化期の土器を比較する。

(3) その他、鉄製品や猛禽類の羽(史料的には「肅慎羽」と呼ばれる)の交流等についてもその交易と交流の実態について検討し、総合的な解釈の裏付けに資するようにする。

4. 研究成果

(1) ガラス玉にみる断絶: 7世紀代の北東北では、古墳の副葬品に大量のガラス玉が存在する。特に岩手県から八戸周辺の終末期古墳に顕著にガラス玉が副葬されている。しかしながら津軽海峡対岸の北海道では擦文期の遺跡から出土するガラス玉が極めて少ないという現象がある。

(2) ガラス玉出土数の地域別変遷: 北海道での出土ガラス玉数についてみると、続縄文期に一定量のガラス玉が使用されているが、擦文文化やオホーツク文化では使用数が激減し、アイヌ文化期のガラス玉が圧倒的に増加している。

(3) 沿海地方では、ウラジオストクの、ロシア科学アカデミー極東支部歴史考古学民族学研究所が所蔵する資料を調査することができた。そのほとんどは、チェルニアチノ5遺跡出土の7世紀代に比定できるものである。12～13世紀の金・東夏期にはシャイガ遺跡でガラス玉数が飛躍的に増加するが、14世紀以後については、その時代の遺跡がほとんど認識されていないので、当該時期のガラス玉の様相は不明である。しかしながら周辺状況との対比から、チェルニアチノ5遺跡から出土したガラス玉は、沿海地方の特色を示していると思われる。チェルニア

チノ5遺跡出土のガラス玉について、日本列島との関係において特に注目されるのは、両端面が非対称な形状を有するガラス小玉である。孔と平行に並ぶ気泡や両端面を貫く気泡筋が観察されることから、引き伸ばし法の一種と考えられるものの、両端面が非対称になるような具体的な成型方法については明らかでない。変則的な引き伸ばし法と呼んでいるものに相当する。ガラスの化学組成については、東京理科大チームの分析によりすべて植物灰ガラスであることが判明している。製作技法と化学組成との関係性から、本科研チームらが Group SIHC と呼んでいるガラス玉に相当することが明らかとなった。

このような両端面が非対称な形状となる変則的な引き伸ばし法による植物灰ガラス小玉 (Group SIHC) は、日本列島では古墳時代後期末 (6世紀末) に出現し、日本列島全域で出土が確認される。とくに7世紀後半以降は、関東から東北北部の太平洋側で大量に流通する。しかしながら、畿内を中心とする日本列島の中心部では、7世紀後半以降は国産の鉛ガラスに収斂し、輸入ガラスの割合は急激に減少することから、当該時期の東北地方の太平洋側で大量に出土する Group SIHC のガラス小玉の流入経路が問題となっていた。今回、時期の近接する本遺跡から製作技法および化学組成の特徴が共通するガラス小玉がまとめて確認されたことから、ロシア沿海地方が流入経路の重要な候補地となったといえる。また金末から東夏にかけての遺跡であるシャイガ遺跡出土のガラス玉については、そのほとんどが巻き付け法によって製作されたものである。ガラスの化学組成については、東京理科大チームの分析により、カリ鉛ガラスとカリ石灰ガラスが存在することが明らかとなっている。巻き付け法によって製作されたカリ石灰ガラス製の玉類は、アイヌ文化期の北海道で大量に流通するが、北海道以外の日本列島では出土例が少ない。今後、化学分析の成果を含めた比較検討により、北海道で出土するガラス玉の生産地や流入経路の解明につながる手がかりが得られると期待される。

シャイガ遺跡で出土したガラス玉の内、もう1点は淡青色半透明のガラス小玉で両端面が平坦で胴部の丸みが乏しく臼状を呈する。気泡の配列方向が一定でなく、開孔部の形状が両端面で異なるのが特徴である。具体的な製作技法は不明であるものの、色調および形態的特徴が極めて類似する資料が北海道枝幸町目梨泊遺跡で5点出土している。目梨泊遺跡は、オホーツク文化に属する遺跡であり、ガラス小玉の副葬時期は8世紀前半と想定される。さらに、2017年のユジノサハリンスクにおける調査でも、11世紀初めごろと想定される Belokamennaia-Chashi (サハリン州郷土博物館) にも同種のガラス玉が1点含まれていることが判明した。これらは製作技法だけでなく、化学組成の特徴も極めて類似している。これらの3遺跡から出土したガラス小玉は、いずれも想定される時期が異なっており、出土数も限定的なことから、流入経路を直接的に示しているとはまではいえないが、このようなガラス小玉は日本列島内では他に類例がなく、北海道の目梨泊遺跡へのガラス小玉の流入経路を示唆するものとして注目される。

(4) アムール河中流域では、ハバロフスク郷土誌博物館とハバロフスク文化局が所蔵する資料を分析できた。この地域では、9世紀以前のガラス玉を見ることが出来なかった。10~11世紀のパクロフカ文化期の資料が中心である。アムール河中流域では、この時期にガラス玉の使用が始まり、近世にいたってガラス玉使用が激増している。

(5) 以上から北海道出土ガラス玉を評価してみることにする。北海道におけるガラス玉の出土状況は、続縄文期から擦文文化期に減少し、アイヌ文化期に激増している。この中で注目したいのは、根室市穂香遺跡で出土した62点のガラス玉である。この遺跡は擦文末期ないしアイヌ初期とされているが、実年代は10~11世紀と推定している。つまり、沿海地方やアムール河中流域のパクロフカ文化と平行する年代である。北海道でも、10世紀代からガラス玉の使用例が増加している可能性があり、擦文文化期の出土事例をこの観点で分析する必要がある。つまり続縄文文化期のガラス玉は、おそらく本州の古墳文化の影響を受けたもので、擦文文化期以後の様相は沿海地方やアムール川流域と同期した現象であると評価できる。

(6) ガラス玉以外の東北地方と北海道に共通する考古学的事象について。擦文文化期 (8~10世紀代) の北海道と北東北の間には、さまざまな遺物や遺構などで共通する考古学的事象を見ることが出来る。

擦文土器の成立に本州系土師器が影響

竪穴住居跡

須恵器 (秋田城周辺窯跡 五所川原周辺の窯跡群)

鉄製品 (五所川原周辺の製鉄遺跡群)

塩 (陸奥湾周辺の製塩)

擦文文化の基層は本州系の土師器文化に遺存し、人とモノの往来も活発に行われていた可能性が高い。しかし、ガラス玉使用の目的である装身・威信という精神世界では、大陸文化と同期していたのではないだろうか。ガラス玉が増加する10世紀以後、擦文文化が次第に変容して

アイヌ文化の成立に向かう頃からガラス玉の使用が激増するのも、北海道の精神世界が大陸と同期していたことを示唆していると結論づけた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 35 件)

- 新井 沙季・中井 泉・瀬川 拓郎・中村 和之、旭川市博物館所蔵河野コレクションのガラスビーズの化学組成分析、函館工業高等専門学校紀要、査読有、53、2019、35 - 44
https://doi.org/10.20706/hakodatekosen.53.0_35
- 高橋美鈴・越田賢一郎・竹内孝・中村和之、オホーツク文化終末期の土器群と化学分析による製作地の推定、函館工業高等専門学校紀要、査読有、53、2019、96-115
https://doi.org/10.20706/hakodatekosen.53.0_90
- 小口 雅史、款状(申文) - 応徳三年正月二十三日付「前陸奥守源頼俊款状」を読む、『古代史料を読む』下 平安王朝篇(佐藤 信・小口 雅史編)、査読無、2018、124 - 136
- 小嶋 芳孝、渤海の金属製カンザシ、『実証の考古学』同志社大学考古学シリーズ 12、査読無、2018、795 - 810
- 小嶋 芳孝、渤海の都城と葬地、『東アジアの古代都城と葬地・墓葬』国際シンポジウム予稿集、査読無、2018、176 - 195
- 中村 和之、骨壘に王はいたか?、人文論究、査読有、88、2018、11 - 14
- 田村 朋美、日本列島出土の古代ガラスの産地と同位体比分析、埋蔵文化財ニュース、査読無、174、2018
- 高橋 美鈴、越田 賢一郎、竹内 孝、中村 和之、北海道せたな町南川2遺跡出土ガラス玉の成分分析、函館工業高等専門学校紀要、査読有、52、2018、66 - 74
https://doi.org/10.20706/hakodatekosen.52.0_66
- 田村 朋美、青野 友哉、中村 和之、北海道伊達市有珠オヤコツ遺跡出土玉類の材質に関する再検討、函館工業高等専門学校紀要、査読有、52、2018、85 - 92
https://doi.org/10.20706/hakodatekosen.52.0_85
- 小口 雅史、青森県外ヶ浜町所在山本遺跡の航空レーザ計測結果について - 三重の壕をもつ所謂「古代防御性集落」の紹介、弘前大学国史研究、査読有、143、2017、25 - 32
- 小口 雅史、在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて(2) - ドイツ・ハイデルベルク ポルトハイム基金民族学博物館の巻、法政史学、査読有、88、2018、88-100
- 小嶋 芳孝、ロシア沿海地方のパクロフカ文化期における墓上建物の新事例 - コクシャロフカ8遺跡の調査報告書から -、『古代国家と北方世界』小口 雅史編、査読無、2017、44 - 61
- 中村 和之、流鬼国をめぐる試論 -、『古代国家と北方世界』小口 雅史編、査読無、2017、96 - 115
- 田村 朋美、飛鳥寺塔心礎出土の真珠製小玉、奈良文化財研究所紀、査読無、2017、58 - 59
- 天野 哲也、オホーツク文化における鍛冶の精神的な意味、『古代国家と北方世界』小口 雅史編、査読無、2017、10 - 17
- 小嶋 芳孝、中澤 寛将、稲垣 森太、高橋 一英、中村 和之、北海道青苗遺跡出土鉄刀のX線画像解析、函館工業高等専門学校紀要、査読有、51、2017、31 - 37
http://doi.org/10.20706/hakodatekosen.51.0_31
- 大賀 克彦、田村 朋美、稲垣 森太、中村 和之、北海道青苗遺跡出土ガラス玉類の考古科学的検討、函館工業高等専門学校紀要、査読有、51、2017、38 - 47
http://doi.org/10.20706/hakodatekosen.51.0_38
- 田村 朋美、薬師者和気遺跡出土ガラス小玉の分析調査、盛岡市遺跡の学び館平成 27 年度館報、査読無、2017、1 - 6
- 小口 雅史、出土文字資料からみた秋田城、『北方世界と秋田城』小口 雅史編、査読無、2016、51 - 80
- 天野 哲也、古代日本列島北部の諸集団間における鉄鋼製品の流通問題、『北方世界と秋田城』小口 雅史編、査読無、2016、269 - 299
- 21 小口 雅史、城柵制支配の廃絶と地域社会の変容、『東北の古代史』5、査読無、2016、11 - 46
- 22 小嶋 芳孝、渤海船の渡来、古代環東海交流史 2、査読無、2016、141 - 157
- 23 大賀 克彦、田村 朋美、日本列島出土カリガラスの考古科学的研究、古代学、査読無、2016、11 - 23
- 24 中村 和之、越田 賢一郎、北海道におけるガラス玉の流入の歴史的背景、『中世沿海州の遺物』査読無、3、2015、227 - 241

[学会発表](計 22 件)

- 田村 朋美、ユーラシア東西交易とガラスの道、明治大学日本古代学研究所シンポジウム「社会変化とユーラシア東西交易-考古学と分析科学からのアプローチ-」2019
- 新井 沙季、中村 和之、村串 まどか、中井 泉、ラプチェフ=セルゲイ、小嶋 芳孝、越田 賢一郎、小口 雅史、中近世極東ロシアのガラス流通に関する考古化学的研究、日本ガ

ラス工芸学会 2018 年度大会、2018

小嶋 芳孝、渤海の都城と葬地、『東アジアの古代都城と葬地・墓葬』シンポジウム、2018

中村 和之、蝦夷錦と青玉の来た道、国際シンポジウム「16-19 世紀東アジア国際関係史研究の可能性」2018

田村 朋美、日本列島出土の古代ガラスの産地と同位体比分析、保存科学研究集会「同位体比分析と産地推定に関する最近の動向」2018

小口 雅史、都母・爾薩地方の古代史―「つぼのいしぶみ」など―、阿光坊古墳群 国史跡指定 10 周年記念講座、2017

小嶋 芳孝、考古学から見る渤海時代のロシア沿海地方、「第 32 回北方民族文化シンポジウム網走」2017

中村 和之、アムール河下流域における明朝と先住民との朝貢交易、「第 32 回北方民族文化シンポジウム網走」2017

小嶋 芳孝、家持がみた能登の風景、大伴家持生誕 1300 年記念シンポジウム、2017

小嶋 芳孝、日本におけるロシア沿海地方調査の展開と方向、シンポジウム「東アジア考古学の最新成果と解釈」、2016

田村 朋美、Archaeometrical analysis of cobalt blue glass beads, Wac-8 Kyoto 2016、2016

中村 和之、北方世界のガラス玉の流通について、みんぱく開館 40 周年記念特別展「ビーズ - つなぐ・かざる・みせる」関連公開研究会、2016

中村 和之、15 世紀以降の北海道とサハリン島における中国銭貨の流通、『アジア世界史学会』第 3 回国際会議、2015

小嶋 芳孝、秋田城出土の羽釜について、金朝建国 900 年記念シンポジウム、2015

〔図書〕(計 2 件)

小口 雅史編、六一書房、北方世界と秋田城、2016、342

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：天野 哲也

ローマ字氏名：(AMANO, tetsuya)

所属研究機関名：北海道大学

部局名：総合博物館

職名：資料部研究員

研究者番号(8桁): 90125279

研究分担者氏名：小嶋 芳孝

ローマ字氏名：(KOJIMA, yoshitaka)

所属研究機関名：金沢学院大学

部局名：文学部

職名：特任教授

研究者番号(8桁): 10410367

研究分担者氏名：中村 和之

ローマ字氏名：(NAKAMURA, kazuyuki)

所属研究機関名：函館工業高等専門学校

部局名：一般人文系

職名：教授

研究者番号(8桁): 80342434

研究分担者氏名：田村 朋美

ローマ字氏名：(TAMURA, tomomi)

所属研究機関名：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

部局名：都城発掘調査部

職名：研究員

研究者番号（8桁）：10570129

(2)研究協力者

研究協力者氏名：越田 賢一郎

ローマ字氏名：(KOSHIDA, kenichiro)

研究協力者氏名：高橋 美鈴

ローマ字氏名：(TAKAHASHI, misuzu)

研究協力者氏名：中澤 寛将

ローマ字氏名：(NAKASAWA, hiromasa)

研究協力者氏名：八木 光則

ローマ字氏名：(YAGI, mitsunori)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。